資　料

21世紀と夏目漱石（2）

― 漱石の時代と現代 ―

金戸清高

21Century and Natsume Soseki（2）
－ Age of Soseki and Present Day －

Kiyotaka KANETO

［要約］およそ120年前に没した夏目漱石の生きた50年は，不思議なことに現代の諸徴候と符牒する部分が多い。まず現代は「新しい戦前」であると言われる。安保関連法案の改変に国民が無関心なのは自分たちに主権がないという無力感の表れであるとも言われる。「しらけ世代」「Z 世代」と呼ばれる現代の若者の精神は漱石の文学作品に多く表された高等遊民すなわち明治大正期の植民地政策における経済繁栄から離れたところにいた知識人の「ニル・アドミラリ」的感情と遠くない。あるいは新型コロナウイルスによるパンデミックは，明治期にコレラ等の感染症が蔓延したことと相通じる。現代日本は既に人口減少社会に突入しており2100年には明治期の人口に戻るとも言われている。「令和の占いブーム」はパンデミックによる世情不安からきたと言われるが，漱石の時代もハレー彗星の接近や御船千鶴子による透視実験が報道されるなど，神秘的なものに関心が寄せられた時代でもあった。現代と漱石の時代との不思議な共通性について述べつつ漱石が作品を通じて社会に訴えてきた問題について考察した。

キーワード：21世紀，現代，夏目漱石，感染症，神秘主義

1．はじめに

「21世紀と夏目漱石」について，これまで考察を進めてきた。特に前著「21世紀と夏目漱石（1）」では現代を取り巻く諸徴候について論を進めてきたが，本稿では漱石の時代と現代との比較を試みる。漱石の生きた時代は明治から大正期（1867～1916年）であるが，現代の状況とは不思議な共通点がみられるのである。

2022年12月16日，「敵基地攻撃能力」を「反撃能力」と読み替え，主権者である国民の信任を経た国会議員による審議もされない内に，今後10年の外交・防衛政策の指針となる「国家安全保障戦略」（NSS）と，それを踏まえた「国家防衛戦略」「防衛力整備計画」の安保３文書が閣議決定された。タレントのタモリ氏の発言を契機に「新しい戦前」という言葉は様々な論議がなされるようになった。[1] 2023年８月６日配信の「Friday Digital」は「『新しい戦前』…80年前と酷似？　戦争資料から浮かび上がる『今の日本のヤバさ』」と題された記事を出した。あるいは内田樹氏と白井聡氏の対談『新しい戦前―この国の“いま”を読み解く』は2023年８月の発刊から４か月で５刷の重版を重ねている。同書で内田氏は「明らかに『戦争が出来る』方向にシフトした」にもかかわらず「メディアは反応しない」し，「国民も」「無関心」であることを「『自分たちは日本の主権者ではない』という無力感の表れだ」と指摘する。現代日本人のこのような気質は「さとり世代」とか「Z 世代」といわれる現代の若者に関せられる特徴とも重なっている。更にこのような風潮は，たとえば近代知識人の「ニル・アドミラリイ」[2]の気分あるいは漱石の作品に多く登場する「高等遊民」[3]たちが抱いていた気分と，おそらく通底するものでもあるだろう。漱石は大恐慌前の1916年に死んだ。1914年に第一次世界大戦が勃発し，「点頭録」（1916）にその戦況の分析をしているがその集結を見ることはできなかった。およそ50年の生涯で明治維新から日清，日露戦争を経験した。現代と漱石の時

代を検証する中でその奇妙な共通性について，論を進めていく。

まず人口の状況から考察する。漱石の生年である1867年の日本の人口は約3000万人，没年の1916年は5000万人であった。[4] 総務省「我が国における総人口の長期的推移」では日本の人口は2004年12月に12,784万人でピークを迎え，2100年には3,770万人（低位推計）に戻る。これは1884（明治17）年の3,794万人のレベルである。一方平均寿命は倍になっている。[5]

ここで漱石の時代と現代の符牒をいくつかの観点から表にしてみた。以下順に詳述する。まず経済問題については前著に詳述したのでここでは省く。ただ海外からの資源を基に経済成長を遂げようとする姿勢は漱石の時代も現代も同じである。こうした経済の歯車から逸脱して社会を傍観する高等遊民も，小森陽一氏の指摘の通り資本主義社会の恵沢に預かることを前提としていることは確かであるが，そうした位置にあったればこそ一連の漱石作品の登場人物たちは近代社会そのものを俯瞰し，人間存在の意味を根源から問いただすことも，また近代社会の行く末を憂えることもできた。資本主義の行き詰まりが指摘される今こそ，新しい社会構造を模索する時でもあろう。

次に「パンデミック」であるが，漱石の時代では天然痘，コレラ，赤痢や腸チフスなどが流行った。因みに漱石は幼少時種痘が元で天然痘を患い，「あばた顔」となった。[6]次に，コレラは幕末から明治にかけ流行した。1858年長崎に入港した米艦ミシシッピー号の乗組員によって持ち込まれ，全国的に流行する。1877（明治10）年には全国的に流行し，内務卿伊藤博文によりロックダウンを発令した。1879（明治12）年８月２日，「虎列刺」発生の府県から来た船舶は予防のため24時間上陸を差し止められた。同８月７日，「虎列刺」流行地から来た旅客は５日間差し止め健康観察の後，通行を許可された(甲第125号)。同11日,「虎列刺」が次第に蔓延の勢いにつき，神社祭礼など人民群集する事業は一切差し止められる甲第127号)。内務省衛生局「法定伝染病統計」にみるコレラ死亡者数は1885年～86年117,723人であった（以上宮崎県「“新型コロナ”と同じ？―明治期のコレラ流行とその対応―」による)。因みに赤痢は1897年に大流行した。一方現代では新型コロナウィルス感染症の流行が挙げられる。2019年12月中国の武漢にて発生した同ウィルスによる感染症は忽ち全世界に広がり，多くの都市がロック・ダウンを余儀なくされた。日本では2020年１月に初の感染者が確認された後２月には全国規模でイベントの中止，延期，規模の縮小が要請，出入国管理局は中国湖北省に滞在歴がある外国人の入国の拒否が始まり，外国人の入国規制は次第に規模を大きくしていった。３月からは小・中学高等学校等について，春休みまで，臨時休校が要請された。その後タレントの志村けん氏や俳優の岡江久美子氏等有名人が相次いで感染死し，４月には緊急事態宣言が発出した。同感染症の対策は2023年５月に５類に移行されたが未だ収束はしていない。2023年５月５日のNHK報道によれば日本での累計罹患者は33,772,764人，死者74,633人であった。無論

【表：漱石の時代と現代との比較】

	漱石の時代	現代
経済	富国強兵、領土拡大、日清・日露戦争、韓国併合 世界は第一次世界大戦	経済成長からその臨界へ（河野龍太郎） 世界：自国第一主義、クライナ戦争大量生産、消費社会の終焉、グローバリズムの終焉、トランプ、イギリスのEU脱退など
パンデミック	天然痘コレラ、赤痢など	コロナウィルス蔓延、ロックダウン
ミステリー	ハレー彗星、御船千鶴子の千里眼など	令和の占いブーム
若者	・立身出世 ・高等遊民	さとり世代 Z世代

漱石の時代における感染症と新型コロナの罹患状況をそのまま比較することはできないが人口比からいえば明治大正期の感染症による死者の数は圧倒的である。しかし医療技術が発展した現代社会から見れば，新型コロナの被害は深刻であった。1960年代に発行された小学生向けの学年誌では「医療の進歩，臓器移植，サイボーグ化」「不老不死」（1961年12月号「小学６年生」）といった記事が掲載された。これは当時発表された200歳まで寿命が延びるという説を元に，最新医療を紹介したものであった。21世紀を迎えた現代において荒唐無稽な物語は顧みられないが，厚生労働省「平均寿命の推移」によれば，1960年の日本人の平均寿命は男性65歳，女性73歳だったが，2019年には男性81歳，女性87歳まで延びた。あるいは2006年に誕生した新しい多能性幹細胞である「iPS 細胞」によって再生医療に大きな可能性を見いだしている現代である。そのような現代にあって感染症の世界的流行は大きな衝撃であった。

２．漱石中後期作品の時代性と現代

前章に掲げた表の内，「ミステリー」と「若者」については漱石中後期作品との関わりの中で考察していく。まず「若者」の感覚と彼等を取り巻く状況について，『三四郎』から読み解いていく。『三四郎』は1908（明治41）年９月から12月まで，『朝日新聞』に掲載された。同紙面では同じ年の４月から８月までは島崎藤村の『春』が掲載された。そして森鴎外の『青年』は1910（明治43）年３月から翌年８月まで，『昴』に掲載された。明治の終わりに，近代を代表する三作家が青春小説を書いたのは偶然ではなかろう。[17] ここではまず，『三四郎』に書かれた，広田の夢について考察する。

> 「夢だよ。夢だから分るさ。さうして夢だから不思議で好い。僕が何でも大きな森の中を歩いて居る。あの色の褪めた夏の洋服を着てね，あの古い帽子を被つて。――さう其時は何でも，むづかしい事を考へてゐた。凡て宇宙の法則は変らないが，法則に支配される凡て宇宙のものは必ず変る。すると其法則は，物の他に存在してゐなくてはならない。――覚めて見ると詰らないが，夢の中だから真面目にそんな事を考へて森の下を通つて行くと，突然其女に逢つた。行き逢つたのではない。向うは凝と立つてゐた。見ると，昔の通りの顔をしてゐる。昔の通りの服装をしている。髪も昔しの髪である。黒子も無論あつた。つまり二十年前見た時と少しも変らない十二三の女である。僕が其女に，あなたは少しも変らないといふと，其女は僕に大変年を御取りなすつたと云ふ。次に僕が，あなたは何うして，さう変らずにゐるのかと聞くと，此顔の年，此服装の月，此髪の日が一番好きだから，かうして居ると云ふ。それは何時の事かと聞くと，二十年前，あなたに御目にかゝつた時だといふ。それなら僕は何故斯う年を取つたんだらうと，自分で不思議がると，女が，あなたは，其時よりも，もつと美しい方へ方へと御移りなさりたがるからだと教へてくれた。其時僕が女に，あなたは画だと云ふと，女が僕に，あなたは詩だと云つた」（十一）（下線引用者。以下同。）

この夢の話がどのような経緯で出てきたかを確認しておく。与次郎は大学の外国文学科に広田を招聘する運動をして，「零余子」名で論文「偉大なる暗闇」を執筆したのだが，この運動は失敗する。それだけでなく新聞には同論文は広田が門下生に書かせたもので，その著者が三四郎であると報じられていた。これは三四郎にとっても広田にとっても（そして滑稽なことに与次郎にとっても）不名誉な誤報であったが，その後三四郎が広田を訪ねた時に語った話である。広田は「もつと美しい方へ方へと」移ろうとして年を重ねてしまったという。広田は無論大学の教師になることを望んではいなかっただろうが，与次郎によって自身の立場を悪くしてしまった状況とこの夢は通底しているだろう。『心』（1914）の先生の言う「明治の精神」（下55，56）をたとえば「富国強兵」「立身出世」といった記号に置きかえてみれば，広田も三四郎も，そのような近代人の路線から外れた人間となるだろう。

ところで広田がその少女と会ったのは憲法発布の年，森有礼暗殺の年であったという。

「憲法発布は明治二十三年だつたね。其時森文部大臣が殺された。（十一）

憲法発布は，史実では1889（明治22）年である。なぜこうした混濁が起きたのか。漱石自身の記憶違いと言えばそれまでだが，「明治二十三年」が漱石にとって大切な記憶にかかる時であったかもしれない。[8]既に多く指摘されていることではあるが，翌年に嫂の登世が死んでいる。1890年８月９日正岡子規宛書簡は漱石の恋愛関係を彷彿するものとして知られているが，以下の件は隠微である。

朝顔も取りつく枝なければ所々這ひ廻つた末漸々松の根方にある四角張たる金燈籠に纏ひ付かなし気にたつた一輪咲きたるは錆びつきて見る影もなき燈籠の面目なり病み上りの美人が壮士の腕に倚りけるが如しとでも表すべきか

漱石の初恋については諸説あるがいずれも憶測の域を出ないのが実情なので本稿でもこれ以上の推測は避けることにする。ただ，この夢の少女の記憶が広田の出生の秘密と関わっていることには留意しなければならないだろう。

「例へば，こゝに一人の男がゐる。父は早く死んで，母一人を頼に育つたとする。其母が又病気に罹つて，愈息を引き取るといふ，間際に，自分が死んだら誰某の世話になれといふ。子供が会つた事もない，知りもしない人を指名する。理由を聞くと，母が何とも答へない。強ひて聞くと，実は誰某が御前の本当の御父さんだ微かな声で云つた。――まあ話だが，さういふ母を持つた子がゐるとする。すると，其子が結婚に信仰を置かなくなるのは無論だらう」／「そんな人は滅多にないでせう」／「滅多には無いだらうが，居る事はゐる」／「然し先生のは，そんなのぢやないでせう」／先生はハゝゝゝと笑つた。／「君は慥か御母さんがゐたね」／「えゝ」／「御父さんは」／「死にました」／「僕の母は憲法発布の翌年に死んだ」（十一）

漱石作品における「画」と「詩」の問題と「結婚に信仰を置かなくなる」人間の関係については別稿「漱石の中後期作品群から得られる現代への示唆」に詳述した。ここでは制度としての近代社会の出発点を20年後に振り返る構図について考察する。「憲法発布の翌年」である1890年は国会開設の年であった。つまりこの年を，制度としての近代日本の出発点とするなら，「もっと美しい方へ方へと」向かっていた日本の近代そのもの，あるいは成長を止められない資本主義社会の様相のアレゴリーとも読める。例えば藤村は『夜明け前』（1929～1935年）において近代のもつ諸問題を自身の祖父の時代である「黒船来襲」（1853年）に遡り，歴史の表舞台ではない中山道の馬込宿から見つめ直した。漱石は『三四郎』において，広田が出生の秘密を知った1920年を起点とし，それを約20年（正確には18年）後である1908年から振り返ろうとしているのである。

序でながら森有礼暗殺事件について記しておく。中西正幸「森有礼の神宮参拝を巡りて」等には以下の状況が記されている。[9]すなわち，1887（明治20）年，新聞が，「ある大臣が伊勢神宮内宮を訪れた際，社殿にあった御簾をステッキでどけて中を覗き，土足厳禁の拝殿を靴のままで上った」と報じ（伊勢神宮不敬事件）問題となった。この「大臣」とは森のことではないのかと，急進的な欧化主義者であった森に人々から疑いの目が向けられる事となった。真実性は定かでないが，この一件が森暗殺の原因となった。森は1889年２月11日の大日本帝国憲法発布式典の日，それに参加するため官邸を出た所で西野文太郎（不敬事件当時伊勢神宮造営掛であった）に短刀で脇腹を刺され没した。たとえば「西南の役」（1877年）を進歩派と保守派とのせめぎあいと捉えるならそのような振幅の繰り返しによって日本は近代化してきたのである。森暗殺事件もそのような一連の揺り返しであったと言えよう。[10]

３．後期三部作執筆前後の社会状況（日本および世界）

ここで漱石作品との関連から1910（明治43）年から1914（大正３）年の状況を見ていく。時代状

況については『日録20世紀』（講談社2008年）を参考にした。

1910（明治43）年は『門』（３～６月）執筆時期にあたる。前年10月，伊藤博文がハルピンにて安重根により暗殺された事件について，『門』に書かれることとなる。

> 「時に伊藤さんもとんだ事になりましたね」と云ひ出した。宗助は五六日前伊藤公暗殺の号外を見たとき，御米の働いてゐる台所へ出て来て，「おい大変だ，伊藤さんが殺された」と云つて，手に持つた号外を御米のエプロンの上に乗せたなり書斎へ這入つたが，其語気からいふと，寧ろ落ち付いたたものであつた。／「貴方大変だつて云ふ癖に，些とも大変らしい声ぢやなくつてよ」と御米が後から冗談半分にわざく注意した位である。其後日毎の新聞に伊藤公の事が五六段づゝ出ない事はないが，宗助はそれに目を通してゐるんだか，いないんだか分らない程，暗殺事件に就ては平気に見えた。＜略＞「どうして，まあ殺されたんでせう」と御米は号外を見たとき，宗助に聞いたと同じ事をまた小六に向つて聞いた。／短銃をポンポン連発したのが命中したんです」と小六は正直に答えた。／「だけどさ。何うして，まあ殺されたんでせう」／小六は要領を得ない様な顔をしてゐる。宗助は落付いた調子で，／「矢つぱり運命だなあ」と云つて，茶碗の茶を旨さうに飲んだ。御米はこれでも納得が出来なかつたと見えて，／「どうして又満洲抔へ行つたんでせう」と聞いた。／「本当にな」と宗助は腹が張つて充分物足りた様子であつた。／「何でも露西亜に秘密な用があつたんださうです」と小六が真面目な顔をして云つた。御米は，／「そう。でも厭ねえ。殺されちや」と云つた。／「己みたやうな腰弁は殺されちや厭だが，伊藤さんみた様な人は，哈爾賓へ行つて殺される方が可いんだよ」と宗助が始めて調子づいた口を利いた。／「あら，何故」／「何故つて伊藤さんは殺されたから，歴史的に偉い人になれるのさ。たゞ死んで御覧，斯うは行かないよ」（三）

小森陽一氏は「どうして」という御米の疑問に宗助も小六も答えられない構図が，連載の直前である1910年２月，死刑が確定した安重根の供述書が報道されるまで知らされなかったことを要因としていることを指摘する。この章の原稿が書かれる時点で漱石がその報道を知っていたかについては不明であるが，「やつぱり運命だなあ」「殺されたから，歴史的に偉い人になれるのさ」と事件を俯瞰する宗助は，実は知識人で，むしろ御米の「どうして」より深い次元でこの事件を捉えているようにさえ見える。『門』の構図，すなわち平凡に見える腰弁夫婦が実は暗い過去を引きずって生きており，宗助が「相当に資産のある東京ものゝ子弟」（十四）であったことを予示する記述として書かれている。

同年の事件として他に，６月に幸徳秋水逮捕，８月には韓国併合が行われた。こうした日本の植民地政策により資本主義社会が確立していく。

一方海外に目を向けると英国では５月にエドワード７世が死去し，10月ジョージ５世が即位する。またロシアでは11月にトルストイが死去した。

５月から７月，ハレー彗星が大接近しシアンガスで人類死滅の風説が流れる。後述するがこうした出来事は漠然とした終末意識を呼び起こす。あるいは超常現象への興味である。６月には柳田国男の『遠野物語』が出版，９月には御船千鶴子による「千里眼」実験が新聞に報じられる。一方漱石の周辺に関する出来事としては３月に末女雛子が誕生し，『門』は雛子の成長とともに書き進められることとなる。同年８月，修善寺の大患，「30分の死」を体験する。これについては同年10月から翌年２月まで「思ひ出す事等」として断続的に掲載されることとなる。以下ランダムに列記する。

1911（明治44）年，１月，西田幾多郎の『善の研究』発刊。２月，文学博士辞退。３月，特別高等警察誕生。４月，銀座に「プランタン」開店。カフェー・ブームが起きる。６月３日日記に，雅楽稽古場にて音楽演習に出席とある。これは『行人』「塵労十七」に書かれる。8月「モナ・リザ」盗難事件が起き，1913年12月に発見される。これについては『行人』に「自分は硬くなつた。さうしてジヨコンダに似た怪しい微笑の前に立ち竦まざるを得なかつた。」（「塵労」二）の記述がある。

９月に雑誌『青鞜』が創刊される。平塚らいてうについては漱石が弟子森田草平との「煤煙」事件の後処理にあたったこともあり，因縁の関係といえる。９月，文芸協会が「人形の家」を初演，主演は松井須磨子であった。10月，辛亥革命が始まる。「草枕」那美のモデルとされる前田卓の妹槌は宮崎滔天に嫁し，革命時には実家の援助を受けつつ自ら働いて子ども達を育て，先祖伝来の田畑も売り払って資金を作り，滔天の活動を支え続けた。11月，池辺三山の朝日新聞社退職を知り自身も辞職を決意するが，思いとどまる。同月末女雛子が急死。『彼岸過迄』「雨の降る日」に当時の状況を綴る。12月，アムンゼンが南極点に到達。

1912（明治45・大正元）年，『彼岸過迄』（１～４月）連載。この年明治天皇崩御（７月）と乃木将軍殉死（９月）といった出来事があり，それが『心』（1914年）に書かれたことはよく知られている。１月には白瀬矗が南緯78度３分に到達した。『彼岸過迄』の敬太郎の冒険趣味と照応する。２月愛新覚羅溥儀が退位。４月にはタイタニック号が沈没。７月には大阪「新世界」が誕生。同月宝塚少女歌劇が発足，1913年には専用の大劇場をもつ。こうした関西の状況については『行人』（1913年11月～14年11月）に書かれることとなる。

1913（大正２）年８月，東北帝国大学理学部が始めて女性に門戸を開放，３人が入学。同月岩波書店が開店。当初は古書店であった。創立者岩波茂雄は後に漱石の尽力により『心』を出版することになる。岩波は漱石から出版のための資金まで借りるなど多大な恩を被っており，漱石の死後は『漱石全集』を出版することとなった。11月，徳川慶喜が死去，前時代の幕が下りた。

1914年，「心」（４～８月）を連載。東京大正博覧会開催（３～７月），日本初のエスカレーターが登場。４月，宝塚少女歌劇団第１回公演。６月，サラエボ事件勃発。オーストリアのボスニア地方の町サラエボで，オーストリア皇位継承者フランツ・フェルディナント大公夫妻がセルビア人青年によって暗殺される。７月，オーストリアがセルビアに宣戦布告し，第一次大戦が始まる。10月，三越呉服店が新装開店。日本橋本店は1904年，日本初の百貨店として登場，1907年には店内に食堂と写真室を開設していた。今回の改装でルネッサンス様式の新館が出来た。鉄筋地上５階・地下１階建てで「スエズ運河以東最大の建築」と称され，アール・デコ調の内装と合わせ建築史上に残る傑作といわれた。エスカレーターやライオン像が話題になった。『心』でも「三人は日本橋へ行つて買ひたいものを買ひました」（下十七）との記述がある。

ところで現代は空前の占いブームという（松井博代「占いブームから垣間見える若年女性たちの自己分析欲求」2021年10月11日等）。「令和の占いブーム」と呼ばれるようだが，背景にはコロナウイルス蔓延による不安感の増大があるという。思い返せば19世紀末から度々流行する「狐狗狸さん」も世情の不安定さと関係していると言われていた（中岡俊哉『狐狗狸さんの秘密』二見書房1974年５月）が，漱石の時代は将にこの時代であった。ちなみに1908年の「断片四九Ｇ（1）」に「コツクリサンノ話」と記されている。

ここで神秘主義について言及する。以下は鏡子夫人の証言である。

> しかし随分感じの強い人と申しますか気の弱い人と申しますか，理屈の上では迷信的なことを一切けなしつけてる癖に，怪談じみた因縁ばなしなど致しますと，怖がりまして，もうよしてくれ，ねられないからなどと，よく寝がけにこんな話になりますと降参したものでした。[22]

怪談噺を苦手とした漱石ではあったが，作品には「夢十夜」「第三夜」（1908年）や「永日小品」の「蛇」（1909年）の他，多くの怪談や神秘的現象を書いた。漱石の出生に纏わる出来事から始まる。漱石夏目金之助は1867年2月９日（旧暦１月５日）に生まれたのだがその日が庚申の日にあたり，その日に生まれた男子は大泥棒になるといわれていた。石川五右衛門や鼠小僧がこの日に生まれたという言い伝えから来ているようだが，このため漱石は「金之助」と名づけられた。生まれながらに金を持たせておけという，所謂「厄除け」だった（水谷昭夫『漱石文芸の世界』1974年１月）。つまり漱石は生まれながらにして根拠のない民間伝承を背負わされていたといえる。

1894（明治27）年，漱石は菅虎雄の斡旋で伝通院脇の法蔵院（小石川区表町73番地）に下宿した。住持の豊田立本は易の心得があった。漱石は豊田から未来を占われたのだがその様子は「思ひ出す事等」に記される。

> 貴方は 親の死目には逢へませんねと云つた。余はさうですかと答へた。 すると今度は貴方は西へ西へと行く相があると云つた。<略> 一年ならずして余は松山に行つた。それから又熊本に移つた。熊本から又倫敦に向つた。和尚の云つた通り西へ西へと赴いたのである（二十八）

「西へ西へと行く相」については漱石自身がそれを肯う記述をしているが前半の「親の死目」云々についても，父直克は1897（明治30）年６月29日，漱石が熊本滞在中に没したことから，豊田立本の予言はこれも成就した。あるいは『彼岸過迄』では「文銭占ない」（「停留所」十七）が登場する。田口の要請で松本の行動を探らなければならなくなった敬太郎に，森本の杖が「指標」（「停留所」二十六）になるという記述もある。

漱石後期作品の時代，神秘主義と終末への漠たる不安が社会を覆っていたと先述した。ここで作品と時代のムードを表す徴候を照らし合わせてみる。

まずハレー彗星（1910年）であるが，『彼岸過迄』に「凡て森本の過去には一種ロマンスの臭が，箒星の尻尾の様にぼうつと掩被さつて怪しい光を放つてゐる」（「風呂の後」三）の記述がある。因みに「帚星」については1908年の「断片四八Ａ」に（方角は不明だが）2階の桟敷から下方に尾を引く「彗星」を見つめる人間のスケッチが残されている。漱石自身も他の同時代人と同じ「ハレー彗星」の目撃者であったが，このスケッチが「帚星」（ハレー彗星）であるかは時代に沿わないため詳らかにしない。また御船千鶴子の千里眼（1910年）については「貴方の千里眼の通り，僕が何にも云はない先に，雷獣の方で勝手に取計つてしまつたやうですから左様御承知を願ひます」（「停留所」七）とある。[11]

『彼岸過迄』の敬太郎は以下のように紹介される。

> 彼は暗に自分の物数奇に媚びようとした。さうして自分の未来を売卜者の八卦に訴へて判断して見る気になつた。彼は加持，祈祷，御封，虫封じ，降巫の類に，全然信仰を有つ程，非科学的に教育されてはゐなかつたが，それ相当の興味は，何れに対しても昔から今日迄失はずに成長した男である。（「停留所」十五）
>
> 迷信のはびこる家庭に成長した敬太郎は，呪禁に使ふ品物を（是から其目的に使ふんだといふ料簡があつて）手に入れる時には，屹度人の見てゐない機会を偸んで遣らなければ利かないといふ言ひ伝へを，郷里に居た頃，よく母から聞かされてゐたのである。（同二十三）

帝国大学を卒業した一文化人である敬太郎ではあったが，超自然的な現象には興味を持ち続けていたのである。漱石は嘗て「琴のそら音」（1905年）において迷信へのゆらぎを体験する登場人物を描いたが，その精神状態は敬太郎とも底通する。

『行人』では「テレパシー」について書かれる。

> その話によると，兄は此頃テレパシーか何かを真面目に研究してゐるらしかつた。（「塵労」十一）
>
> 兄は其時しきりに死といふものに就いて云々したさうである。彼は英吉利や亜米利加で流行る死後の研究といふ題目に興味を有つて，大分其方面を調べたさうである。けれども何れも是も彼には不満足だと云つたさうである。彼はメーテルリンクの論文も読んで見たが，矢張り普通のスピリチユアリズムと同じ様に詰らんものだと嘆息したさうである。（「塵労」十五）

「人から人へ掛け渡す橋はない」（「塵労」三十六）というＨさんの言葉に一郎は疑義を唱える。一郎は繰り返し問いかける。「御前他の心が解るかい」（「兄」二十），「君の心と僕の心とは一体何処迄通じてゐて，何処から離れてゐるのだらう」（「塵労」三十六）。国木田独歩は「号外」（1906年）において日露戦後の日本人の空虚さと連帯感の喪失を訴

えた。一方如何に他者を理解するかは漱石の重要な作家的課題であったといえる。登場人物の「千里眼」や「テレパシー」への興味もそうした他者とのつながりを志向してのものであった。

先述したが漱石は1911年11月29日に末女雛子を亡くした。当時の断片「不思議」「子供ノ死，夫婦の和解」「子供ノ死　freethinker ノ superstitious ニナル」[13]については既に別項「『彼岸過迄』の人間関係」で詳述したところであるが，ここで「不思議」について今一度考えてみたい。

丸山圭三郎氏は言葉の命名作用について「それまで存在しなかった対象を生み出す根元的作用」があると指摘された。所謂「言霊の力」である。漱石は雛子の死を目の当たりにし，嘗て自身が書いた『三四郎』の「子供の葬式」の場面を想起し，人知れず慄然としたのではなかったか。[14]

> 小供の葬式が来た。羽織を着た男がたつた二人着いてゐる。小さい棺は真白な布で巻いてある。其傍に綺麗な風車を結ひ付けた。車がしきりに回る。車の羽瓣が五色に塗つてある。それが一色になつて回る。白い棺は綺麗な風車を断間なく揺かして，三四郎の横を通り越した。三四郎は美くしい葬だと思つた。／三四郎は他の文章と，他の葬式を余所から見た。（「三四郎」10）

「他の葬式を余所から見た」三四郎を書いた漱石は，その僅か３年後に自身の子の死を経験することになったのである。「雨の降る日」では松本を「葬式」の当事者として書いたが，一方で敬太郎を葬式の傍観者として書いてもいる。

> 彼は千代子といふ女性の口を通して幼児の死を聞いた。千代子によつて叙せられた「死」は，彼が世間並に想像したものと違つて，美くしい画を見る様な所に，彼の快感を惹いた。けれども其快感のうちには涙が交つてゐた。苦痛を逃れるために已を得ず流れるよりも，悲哀を出来る丈長く抱いてゐたい意味から出る涙が交つてゐた。彼は独身ものであつた。小児に対する同情は極めて乏しかつた。それでも美くしいものが美くしく死んで美くしく葬られるのは憐れであつた。彼は雛祭の宵に生れた女の子の運命を，恰も御雛様のそれの如く可憐に聞いた。＜略＞森本に始まつて松本に終る幾席かの長話は，最初広く薄く彼を動かしつゝ漸々深く狭く彼を動かすに至って突如として已んだ。けれども彼は遂に其中に這入れなかつたのである。其所が彼に物足らない所で，同時に彼の仕合せな所である。（「結末」）

『三四郎』は「低徊家」（四）であった三四郎が美禰子を契機に「迷羊」（十三）へと追いやられる構図であったが，『彼岸過迄』の敬太郎は一貫して「傍観者」なのである。「平凡を忌む浪漫趣味の青年」（「風呂の後」四）であった敬太郎は，須永を取り巻く人間たちと関わりながら「遂に其中に這入れなかつた」。しかしそれは彼にとって「仕合せ」でもあったという。代助にしろ宗助にしろ，渦中の人物の苦悩は計り知れないからである。

４．漱石の文学的出発と現代における文学の意義

2018年３月に告示された高等学校「国語科学習指導要領」の改編により「文学国語」が選択科目となったことは中等教育の「国語科」における文学教材の軽視につながるとされ義論を呼んでいるが，理由は「PISA2012」における「読解力の低下」への対策としての改変とされている。しかし既に別項「小学校国語科教育における『我が国の言語文化に関する事項』の意義」にて指摘したが，「国語科」の学びにおいて「国語の特質」のひとつである比喩，婉曲，逆説などの理解のためは，文学教材の学びが不可欠なのではないか。そのような文学軽視の風潮の中，荒川洋治氏は「文学は実学である」として以下のような指摘をされた。

> この世をふかく，ゆたかに生きたい。そんな望みをもつ人になりかわって，才覚に恵まれた人が鮮やかな文や鋭いことばを駆使して，ほんとうの現実を開示してみせる。それが文学のはたらきである。＜略＞文学は，経済学，法律学，医学，工学などと同じように「実学」なのである。社会生活に実際に役立つものなのである。そう考えるべきだ。特に社会問題

が，もっぱら人間の精神に起因する現在，文学はもっと「実」の面を強調しなければならない。＜略＞それくらいの激しい力が文学にはある。読む人の現実を，生活を一変させるのだ。文学は現実的なもの，強力な「実」の世界なのだ。文学を「虚」学とみるところに，大きなあやまりがある。科学，医学，経済学，法律学など，これまで実学と思われていたものが，実学として「あやしげな」ものになっていること，人間をくるわせるものになってきたことを思えば，文学の立場は見えてくるはずだ。

近代文学に「没理想」（坪内逍遙）が提唱されて以来，文学が何かの「ために」あると言うことに躊躇いがちであるのだが，荒川氏の「文学は実学である」との指摘は新鮮であった。それはまた，漱石が当初文学をどのようにとらえていたかを考えることにおいて重要な示唆を与えてもいる。

漱石は1886（明治19）年，腹膜炎を患い原級に留まったが，その際米山保三郎と同級になる。漱石は当初建築家を志望していたようだが，（1890年頃か）米山に諭されて文学に転向したという。以下漱石の文章からその経緯をみる。

元来僕は漢学が好で随分興味を有つて漢籍は沢山読んだものである。今は英文学などをやつて居るが，其頃は英語と来たら大嫌ひで手に取るのも厭な様な気がした。＜略＞其処で僕も大に発心して大学予備門へ入る為に成立学舎＜略＞へ入学して，殆んど一年許り一生懸命に英語を勉強した。＜略＞初めの中は少しも分らなかつたが，其時は好な漢籍さへ一冊残らず売つて了ひ夢中になつて勉強したから，終にはだんだん分る様になつて，其年（明治十七年）の夏は運よく大学予備門へ入ることが出来た。＜略＞君は建築をやると云ふが，今の日本の有様では君の思つて居る様な美術的の建築をして後代に遺すなゝ云ふことは，迚も不可能な話だ，それよりも文学をやれ，文学ならば勉強次第で幾百年幾千年の後に伝へる可き大作が出来るぢやないか。と，米山は恁う云ふのである。＜略＞恁う云はれて見ると成程然うだと思はれるので，又決心を為直して僕は文学をやることに定めたのであるが，国文や漢文なら別に研究する必要もない様な気がしたから，其処で英文学を専攻することにした。（「落第」「中学文芸」1906（明治39）年９月15日）

其時かれは日本でどんなに腕を揮つたつて，セント，ポールズの大寺院のやうな建築を天下後世に残すことは出来ないぢやないかとか何とか言つて，盛んなる大議論を吐いた。そしてそれよりもまだ文学の方が生命があると言つた。＜略＞自分はこれに敬服した。さう言はれて見ると成程又さうでもあると，其晩即席に自説を撤回して，又文学者になる事に一決した。随分呑気なものである。（「文章世界」1908（明治41）年９月15日）

同様の文章は他にもいくつかみられるので漱石と米山とのやり取りはおよそこの通りであったのだろう。漱石は幼少時から漢籍に親しんでいたが英語は「大嫌ひ」だったという。ところが大学予備門に入学するのに英語を学習する必要があったため，好きだった漢籍を「一切残らず売つて」英語に取り組んだという。ここで留意したいのは当初漱石が文学を志向して英語を学んだのではないということである。むしろ時代の要請と言うべきだろうか。とはいえ漱石が後に英国留学（1900～1903）を経て「文学論」を講ずることになった契機は米山の影響に負うところが大きかったのである。しかしこの時点では漱石にとって「幾百年幾千年の後に伝える可き大作」が小説であることを意味してはいなかった。漱石が小説家としてデビューするのは更に後，それも偶々，高浜虚子の依頼を受け自宅で飼っていた猫を素材にして1905（明治38）年１月，『ホトトギス』に掲載した「我が輩は猫である」が予想外の評判となったためである。『道草』（1915年）には「たゞ筆の先に滴る面白い気分に駆られた」（八十六）と書かれる。一方『帝国文学』に発表された「倫敦塔」を書き終えた時の様子を「彼は筆を投げて畳の上に倒れた。／『あゝ，あゝ』／彼は獣と同じやうな声を揚げた」（百一）と対照的であった。[15] 詳しくは稿を改めるが「倫敦塔」においてはじめて漱石は＜

書く＞ことの意味を掴んだのであった。

もう一点，漱石の初期作品において重要なのは「草枕」（1906年９月）の＜非人情芸術＞である。既に拙稿「夏目漱石『草枕』」にて触れたことだが，同年３月には島崎藤村が『破戒』を発表し，近代日本文学史における自然主義文学の先駆けとなった。漱石自身もこれを「後世に伝ふるべき名編」（４月３日森田草平宛書簡）と賞賛したが，漱石は「草枕」を「芸術観及び人生観の一局部を代表した」（８月７日畔柳芥舟宛）ものとし，美を主眼とした小説として発表した。作中で「余」は東洋の詩を「出世間的」（一）とし，旅中に出会う人や物を，なるべく人情を廃して観察しようとするのである。無論それは永続的なものではない。それ故画工を自認する「余」は，旅中で得た美的世界を「一服の画」として完成させ，「胸中」（十三）に封じ込める必要があったのである。それゆえ「草枕」は，その小説内空間の中で，画材とモチーフを模索する「余」の，十三の素描が収められたスケッチブックと捉えることができる。

作品は最終章において登場人物である那美の顔に「憐れ」が浮かび，胸中の画は「成就」する。しかし「現実世界」は作品の中途で既に那古井の温泉場にも押し寄せており，「余」は「夢みる事よりほかに，何らの価値を，人生に認め得ざる一画工」（八）と，自身の非人情芸術を作中内にて相対化する。漱石は「草枕」発表後，弟子の鈴木三重吉に次のような書簡を送った。

> 只きれいにうつくしく暮らす即ち詩人的にくらすといふ事は生活の意義の何分一か知らぬが矢張り極めて僅少な部分かと思ふ。で草枕の様な主人公ではいけない。＜略＞僕は一面に於て俳諧的文学に出入すると同時に一面に於て死ぬか生きるか，命のやりとりをする様な維新の志士の如き烈しい精神で文学をやつて見たい。それでないと何だか難をすてゝ易につき劇を厭ふて閑に走る所謂腰抜文学者の様な気がしてならん（鈴木三重吉宛書簡1906年10月26日）

これを漱石的文学世界の幕開けと捉えることもできよう。ただ上の記述をみる限り漱石自身は「俳諧的文学」を捨て去るとまでは言っていない。むしろ「余」の視点は三四郎や敬太郎などにも受け継がれているのである。先に引用した米山保三郎の言葉「幾百年幾千年の後に伝へる可き大作」であるが，漱石はその通り「維新の志士の如き烈しい精神」で後世に残る作品を書き続けた。

> 牛になる事はどうしても必要です。吾々はとかく馬にはなりたがるが，牛には中々なり切れないです。＜略＞牛は超然として押して行くのです。何を押すかと聞くなら申します。人間を押すのです。文士を押すのではありません。（芥川龍之介・久米正雄宛1916年８月24日）

漱石は晩年，芥川龍之介ら若い世代に向け，このような書簡を送った。「人間を押す」「牛に」なれという。凡そ12年間の小説家人生で，漱石は一貫と押し続けたのである。

注

1．テレビ朝日「徹子の部屋」2022年12月28日の放送であったという。黒柳徹子氏はその後『続窓ぎわのトットちゃん』（2023年10月３日講談社）を執筆することになるのだが，その動機を「ウクライナの問題で子どもたちはどうしているのだろうと思ったとき，戦争のときに子どもだった自分はどうだったか思い出しました。子どもにとって戦争の何が一番嫌かと言うと，自由ではない，何をやってもいけないということだと思います。当時の戦争を思い出すのも嫌でしたが，そのことを考えて続編を書こうと思いました」（「NHK 首都圏ナビ もっとニュース」「黒柳徹子さんの自伝的な物語『窓ぎわのトットちゃん』続編42年ぶり刊行」2023年10月４日　https://www.nhk.or.jp/shutoken/newsup/20231004c.html）と語った。また同書の後書きにも上記タモリ氏の言葉が引用されており，タモリ氏の「新しい戦前」発言が同書執筆の契機となっていることが推測される。

2．原ラテン語（Niil admirari あるいは Nihil admirari。Nihil は「空虚」を意味する「ニヒル」の語源）。2018年の TV アニメのタイトルで有名になったようだが明治期の知識人の空虚な気分をあらわす言葉として用いられ

た。引用は森鴎外「舞姫」（1890年）の表記に従った。

3．小森陽一氏は近代日本の植民地施策に伴う「高利回りの『公債』が利子生活者としての『高等遊民』の生活を支えていた」と指摘する（『ポストコロニアル』2001年４月岩波書店）

4．国立社会保障・人口問題研究所（https://www.ipss.go.jp）のデータによると1867年の人口は33,831千人（推計），1916年は53,496人であった。

5．2023年２月20日「信濃毎日新聞デジタル」では「1891（明治24）～98年の平均寿命は，男性42.8歳，女性44.3歳。一方，最新の2020年の第23回完全生命表では，男性81.56歳，女性87.71歳になっている。（「日本人　明治から２倍長生きに〈老化と寿命の謎を探る〉⑤」（https://www.shinmai.co.jp/news/article/CNTS2023022000115#）
一方世界は産業革命時の人口爆発から増加し続けるが22世紀に110億人で頭打ちとなることが予測されていることは前著（「21世紀と夏目漱石（1）」前掲）で指摘した。

6．「あばた顔」については鏡子夫人の証言（夏目鏡子述松岡譲筆録『漱石の思ひ出』岩波書店1929年10月）等もあるが小森要一氏は感染症と漱石作品との関連を指摘した『感染症の時代と夏目漱石の文学』（かもがわ出版2021年９月）。

7．同時代作家の共時的な影響性については改めて論じてみたい。

8．漱石の書簡をみる限り，原稿の校正については時としてかなり厳密な指示をする（1907年８月８日渋川玄耳宛等）一方，単行本に関しては「小生は自分の作を本になつてから読んだ事は無之候」（1910年５月23日阿部次郎宛），とあまり関心を抱いてはいない。本稿で引用している岩波版『漱石全集』は基本的に原稿が底本となっているが，初出（「朝日新聞」）および単行本（1909年春陽堂）では「明治二十二年」と訂正されている。

9．なお中西論文には1888（明治21）年８月１日付「東京電報新聞」573号の記事が紹介されている。以下孫引きを容赦いただきたい。「現時ニ生レテ一国ノ政事申ス大臣ノヒトリトシ，殊ニ風教ノ上ニ付キ尠カラサル関係有ル人ニシテ左ル振舞ノアル可クモ思ハレ子ド，過ル頃其大臣カ巡廻ノ途次其地ニ過キラレタル時ノ事ナリトカ，其人ハ随行者ヲモ引具セス唯一人ニテ宗廟ニ詣ラレシカ如何カ思ハレケン，突然拝殿ノ奥，一般ニ侵入ヲ禁シタル内庭ノ方ニヅカヅカト踏入ラルヽニソ，神官ジャ周章テヽ走出テ其所ハ古ヨリ皇族トテモ立入ラルヽヲ許サヾルイ地ナレハ留マリ玉ヘト遮キリシヲ，ソーカト計リ答ヘツヽ猶歩を奥殿ノ階上ニ進メ打下シタル玉簾ヲ左モ無作法ニ携ヘ持テルステツキノ先キニテ擎（かか）ケ正面ニ突立チ，暫シ神鏡ノ方ヲ打守リテ立去ラレシト云」。このように「大臣」の実名は明かされていない。

10．現代との符牒という観点で短絡することは許されないが，2022年７月８日の安倍晋三襲撃事件は，いつの日か，時代の変化の徴候として位置づけられることになるのかもしれない。

11．「千里眼」については他に『明暗』（1916年）に以下の記述がみられる。「あたしの様なものが眼利をするなんて，少し生意気よ。それにたゞ一時間位あゝして一所に坐つてゐた丈ぢや，誰だつて解りつこないわ。千里眼でもなくつちや」／「いやお前には一寸千里眼らしい所があるよ。だから皆なが訊きたがるんだよ」／「冷評しちや厭よ」／お延はわざと叔父を相手にしない振をした。然し腹の中では自分に媚びる一種の快感を味はつた。それは自分が実際他に左右思はれてゐるらしいといふ把捉から来る得意に外ならなかつた。けれどもそれは同時に彼女を失意にする覿面の事実で破壊されべき性質のものであつた。彼女は反対に近い例証としてその裏面にすぐ自分の夫を思ひ浮べなければならなかった。結婚前千里眼以上に彼の性質を見抜き得たとばかり考へてゐた彼女の自信は，結婚後今日に至る迄の間に，明らかな太陽に黒い斑点の出来るやうに，思ひ違い痕違の痕迹で，既に其所此所汚れてゐた。畢竟夫に対する自分の直覚は，長い月日の経験によつて，訂正されべく，補修されべきものかも知れないといふ心細い真理に，漸く頭を下げ掛けてゐた彼女は，叔父に煽られてすぐ図に乗る程若くもなかつた。（六十四）

12．「死ぬか，気が違ふか，夫でなければ宗教に入るか」（「塵労」三十九）の状況にまで自己を追い込む一方で「何うかして香厳になりたい」（「塵労」五十）という一郎の姿は『心』のＫにその一面が受け継がれる。Ｋは，聖書の他コーランからスウェーデンボルグにまで興味を示す（下二十，二十七）。「意志の力を養つて強い人にな」（下二十二）ろうとしたが「道」（下十九）の半ばで命を絶った。

13. なお「雨の降る日」に「不思議」は頻出する。「松本が不思議さうな顔をして出て来た」「（医者）何うも不思議です。不思議といふより外に云ひ様がないやうです」「（松本）何うも矢つ張り不思議だよ」（四）「須永は，不思議さうに筆と紙を受取つた」（五）「千代子は広い本堂に坐つてゐる間，不思議に涙も何も出なかつた」（六）。ちなみに『彼岸過迄』は「不思議」は37件検索される。『行人』は23件，『心』は16件である。
14. 「断片四八Ａ」（明治四一年（初夏以降））に「竹ノ輪　ブラサゲル／風車　短冊／小児ノ棺桶」の記述とスケッチがあり，重松泰雄は「実際に漱石が会ったことのある葬式か」（『日本近代文学大系　夏目漱石Ⅲ』1972年角川書店）と推測する。それに先立ち1906年8月31日付藤岡作太郎宛書簡には「御息女小田原表にて御逝去のよしは畔柳氏より先達承はり何とも御気の毒の至に不堪十歳以下の小児の病気程心苦しきものは無之　実は小生も四人の小供をもち候夫が時々病気を致し候節は自分の病気より遙かに心配に候現に第三女は赤痢にて今朝大学病院に送られ候。かうなると自分の小供の病気を微分にかいて見様抔と云ふ余裕は出る所無之候。傑作は出来なくてもよいから早く全快してくれゝばよいと，夫のみが苦になり候。五六年後には小供の死もうつくしく感ぜられて小説の材料になるやもはかりがたく候へども現に病人の児を抱へたる親はいかな詩人でもそんな余裕はあるまじくと存候。今日病院に入りたる児はうちへ帰りたいくと申す由，大兄のご令嬢が夏目さんくと云はれたと同様に候」という。雛子の死はまさにこの書簡の5年後の出来事である。
15. 『道草』については拙稿「夏目漱石『道草』論－その自伝性をめぐって－」を参照されたい。

引用文献

荒川洋治（2002）．文学は実学である．みすず書房

金戸清高（1996）夏目漱石「草枕」．近代の小説．協和書房

金戸清高（1996）．夏目漱石『道草』論－その自伝性をめぐって－．方位，19

金戸清高（2001）．『彼岸過迄』の人間関係－「不思議」を起点として－．山口国文，24

金戸清高（2021）．小学校国語科教育における「我が国の言語文化に関する事項」の意義－「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」からの移行－．VISIO，52

金戸清高（2023）．21世紀と夏目漱石（1）－現代におけるいくつかの徴候－ VISIO，54（印刷中）

金戸清高（2024）．漱石の中後期作品群から得られる現代への示唆　日本文芸学，59（印刷中）

講談社．Friday Digital．（2023年8月6日14：00配信）（https://friday.kodansha.co.jp/article/324748）

小森陽一（2001）．ポストコロニアル．岩波書店

厚生労働省．平均寿命の推移．（https://www.mhlw.go.jp/stf/wp/hakusyo/kousei/19/backdata/01-01-02-01.html）

丸山圭三郎（1987）．言葉と無意識．講談社現代新書

宮崎県．“新型コロナ”と同じ？ ―明治期のコレラ流行とその対応―．（https://www.pref.miyazaki.lg.jp/documents/8753/8753_20200421173246-1.pdf）

中西正幸（1982）．　森有礼の神宮参拝を巡りて．神道研究紀要 6

中岡俊哉（1974）．狐狗狸さんの秘密．二見書房

総務省．我が国における総人口の長期的推移．（https://www.soumu.go.jp/main_content/000273900.pdf）

小学館（2018）．学年誌が伝えた子ども文化史－昭和30～39年編 . 小学館

角田晶夫（2021）．明治時代の報道被害？「伊勢神宮不敬事件」で暗殺された森有礼のエピソード．（https://mag.japaaan.com/archives/152680）

内田樹・白井聡（2023）．新しい戦前－この国の“いま”を読み解く．朝日新書，920

（2024.1.24受稿　2024.2.20受理）

21Century and Natsume Soseki（2）
－ Age of Soseki and Present Day －

Kiyotaka KANETO

The 50 years that Natsume Soseki, who died about 120 years ago, lived, strangely enough, have many similar incidents of present day. First of all, the modern era is said to be a “new prewar period”. Nevertheless the people’s indifference to changes to security-related bills is an expression of their sense of powerlessness, that they do not have sovereignty. The spirit of today’s young people, known as the “Shirake Generation” or “Z Generation,” is similar to that of the high-class nomads, often expressed in Soseki’s literary works, and of the intellectuals who were far removed from the economic prosperity of the colonial policy of the Meiji and Taisho periods. It’s not far from the sense of “Nil Admirari.”　Then, the pandemic caused by the covid19 is similar to the spread of infectious diseases such as cholera during the Meiji period. In modern times, Japan has already entered a declining population, and it is said that the population will return to the Meiji period in 2100. The “Reiwa fortune-telling boom” is said to have arisen from the social unrest caused by the pandemic, but even during Soseki’s time there was interest in mystical things, such as the approach of Halley’s Comet and Chizuko Mifune’s clairvoyance experiments. there were. While talking about the strange similarities between present area and Soseki’s time, I will try to consider about the issues that Soseki appealed to society through his works.

Key words: 21century, Present day , Natsume Soseki, infection, mysticism